

# 知っていますか？ 郷土の民話

## 八龍山の伝説

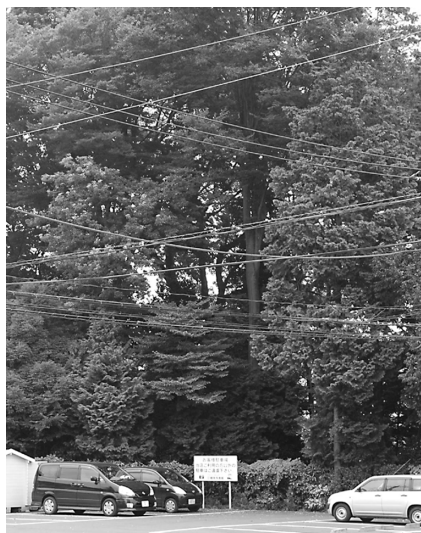
先月号では、普門寺のイチヨウについてご紹介しましたが、今月紹介する八龍山はちりゅうやまの伝説も、普門寺のイチヨウと同じ室町時代にさかのぼるお話です。

今を去ること50年以上前の文明年間、普門寺の夜哭よなき銀杏が供養され切り倒され、たくさんの蛇が這い出して行った方向に、八龍山がありました。それから数日たったある日、蒲生村の百姓の喜右衛門さんが八龍山の前にさしかかると、この山の中から大きな物音と共に大蛇が首を出し、炎のように真っ赤な舌を出しながら、八つの頭を持つ龍となつて、喜右衛門さんに向かってきました。喜右衛門さんは動転して、普門寺の信俊和尚しんしゅんの元に駆け込むと、和尚は五鉈ごこという仏具をもって、龍の元に向かいました。

和尚を見た龍は、大きな口を開けて来ました。和尚は真直ぐ龍の前に進み出て、暴れ狂う龍に向かつて、法華経を聞かせながら、持っていた五鉈を真っ赤に燃える炎を吐き出す龍の口に差し出しました。龍は五鉈の一部を噛み切ると、満足そうに八つの頭を下げ、大きな胴体を横にした一つの塚と、七つの円い塚となつてしまいました。喜右衛門さんは大変喜び、和尚の深い大きな徳に感動し、供養のために一つのお堂を建て、和尚に寄進しました。その後、喜右衛

門さんの家はお金持ちになり、建立したお堂は宝蔵院と名づけられたといわれています。

さて、この八龍山ですが、現在も残っている場所なのです。上三川町役場の南東にある木が茂った塚が、この八龍山なのです。話の中で、「大きな胴体をした一つの塚」とあるのは、この塚を横から見るとそのような形に見えるからなのでしょう。話の中では室町時代にできたこの塚は、実は古墳時代の前方後円墳と呼ばれる古墳で、以前行われた発掘調査で、たくさんの埴輪が出土しています。そして、鎌倉時代から安土桃山時代には上三川城の物見櫓として機能したとの伝承が残されています。残りの七つの塚については、早くから周辺の開田や宅地化が進んだことにより、現在は無くなつてしまつていますが、これらも八龍塚と同時期の古墳と考えられます。事実とは異なることではあつても、塚に対する人々の親しみが伝わってくるお話です。



現在は緑に覆われた八龍山

## 広報短歌

梅雨晴れに硬き蕾のとかれぬて

床しく香る梔子の花

巢立ちたる孫らの部屋を一ぱいに

開けて祭の風招き入れ

武藤 ひさ

宵闇の風にのりくる梔子の

香に一日疲れ癒さる

五月雨の注ぐ木陰に日もすがら

蛙おちこち競い鳴きする

高田 幸子

脱皮しつつ柚子の青葉を食べつくす

殺虫剤をのがれし命

はつ夏の風に植田の青なびく

季を憩いて眼を養なえり

菊地 美代

五月雨の降りつぐなかに色深む

箱根卯木に亡き師しのぼる

深き霧刻たつほどに薄れつつ

やぶ甘草の群うかびくる

斎藤 アツ子

兜虫生れしばかりの稚なきを

戻す森かげ風さやかなり

時鳥近く声すもそのかげの

深む青葉のいろに融けつつ

稲葉 啓子